# 序

東大文学部考古学研究室研究紀要も号を重ねて，ここに第5号を刊行する運びとなった。

この一年間も，研究室一同の研究活動はたゆみなく続けられ，ここにその成果を発表することができたことを心から喜ぶものである。

今日の考古学界は，全国的な発掘の増加と，それに伴う爆発的な資料の増加によって押し潰されそうな状況にあることはいうまでもない。また年間出版される報告書は，実際にすべて読みこなすことは到底不可能である。

しかし，このような時にあってこそ，われわれがなすべきことは，資料に即しての地道な分析と，広い視野に立った総合的考察のバランスのとれた研究である。

このことの必要性については，多くの人々のすでに気がついていることであり，ことに総合的研究については，いくつかの論考が試みられている。

しかし，そこにまま見られる欠点は，総合的な単なる思い付きを述べるだけで，それに至る論理の過程が何ら示されていないことである。その多くは他の学問の用語の安易な借用であるが，これでは他の学問を援用しての考古学における新しい領域の開拓は誠に覚束ない。

たしかに，思い付きや勘のようなものはどの分野でも必要であるが，その裏付けとなる何らの論理の構築も示されないということでは，学問の進歩は期待できるものではない。

生業論，集団論，葬制論，技術論，精神文化論を論じるに当たって，これは決して忘れてはならないことである。

当研究室においても，教官・学生一同多くの分野にわたって分析・総合の研究を進めているが，今後も常にこのことに留意し，切磋琢磨しながら研究に励んでいきたい。

なお最後になったが，本紀要の英文要約の校訂に当たってR.ズグスタ氏のお世話になったことを記して感謝の意を表したい。また編集に当たった今村啓爾助手，原稿を整理した深井恭子氏の労を多としたい。

東京大学文学部考古学研究室

上　野　佳　也